佐土原キリスト教会 2023年10月22日 礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書6章1～4節
説教題：神か人か

カナダにいた時のことです。駅の前、モールの前、あちこちに「小銭を恵んでくれ」と言って来る人が沢山いました。私も、出来る時には、僅かな額を恵むことが多かったように思います。それが良いのかどうか、一度、教会の交わりの中でも議論になったこともありましたが…。ある時、何を思ったのか、5 ドル紙幣を恵んだことがありました。そうしたら、アパートに帰って来たら、アパートの1 階のゴミ捨てのところに立派な本棚が捨ててありました。そこに捨ててあるものは、誰でも持って行って良いことになっていましたので、私は喜んでその本棚を頂いて部屋に運びました。「神様が5 ドルのことを見ていて報いて下さったのかな」と勝手に思ったことでした。今日の箇所を読んで、その時のことを思い出したことでした。

6 章 1 節に「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい」(6:1)とあります。これをある英語の聖書は、「人に見せるために人前で宗教(敬虔)をしないように気をつけなさい」と訳しています。ですからこの「善行」は、「信仰の行いとしての善行」ということになります。当時のユダヤ人には、「施し、祈り、断食」という宗教的三大義務―(信仰の行い)―がありました。それは宗教的な義務という面もありましたが、「信仰生活を営む時に最も大切な行い」とも考えられていました。それでイエス様は、「人に見せるために人前で宗教(敬虔)をしないように気をつけなさい」と言われた後、(2 節からは)「施し」について、(5 節からは)「祈り」について、(16 節からは)「断食」について、取り上げて行かれます。

当時、「あの人は信仰深いか」ということがどこで分かるかというと、この3 つの行いで分かったし、またそれで測ったようです。イエス様も、決してその 3 つの行いを否定してはおられません。今日の箇所でも、「もし施しをするなら」とは言われないで、「施しをするとき」と言っておられます。同様に「祈るときには」(5)、「断食するときには」(16)と、自分の弟子達もこれらの行いをすることを前提として語っておられます。このような具体的な行いを通して神への愛を表して行くことを、イエスは否定されません。むしろ当然のこととしておられます。大事なことだからこそ、その中に生まれる「崩れ(問題点)」を取り上げられるのです。しかも、「その人が信仰深いかどうか」、測られるようなことですから、それが崩れているということは、逆に言うと、信仰の土台が崩れているということを表すことでもあったのです。しかし現実には、それが崩れていたのです。どのように崩れていたのか。本来「神を愛する故の行為、神に捧げるはずの行為」が、「人に見せるためのもの」になっていた、ということです。

今朝の箇所で取り上げられるのは「施し」です。イエス様は「施し」について取り上げて、信仰の核心とも言える問題について教えて行かれます。

ユダヤ人にとって、三大義務の中でも「施し」は最も神聖な義務だと考えられていました。社会福祉等のない時代、現実的にも重要だったでしょう。「『施し』は罪を聖め、人を死から救う」と言われました。それは―(人に対してするわけですが、でも)―「信仰的な行い」として神様に対して捧げられるものでした。ですからその業は、神に見て頂けば良いわけで、その意味で見せびらかすことなく、密かに行うことが勧められました。

ところが、そこに「人に見せるために人前で善行を(する)…」(1)、「人にほめられたくて会堂や通りで施しをする…」(2)ということが入り込んで来たわけです。イエス様の時代、多くの人は、自分が気前良く人に与える様子を他の人に観てもらって、その慈善行為に相応しい賞賛や社会的な地位を得るために、人に見られ易い時間や場所を選んで施しをするようになっていたようです。イエス様は言われます。「施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません」(2)。人々が―(特にパリサイ人や律法学者が念頭に置かれてい

るのでしょうが)―実際に従者にラッパを吹かせていたのかどうかは分かりません。しかし、ラッパを吹くかどうかは別として、本来、神に見て頂けば良い行為を、人に「信仰的な人だ」と思われること、そのような欲望やプライドを満足させるために、わざと人々の注目を集めるような方法で行ったのです。イエス様は、それを「偽善だ」と言われる。「偽善」とは、元々「演じる」という意味で、それは「人に見せるために善を演じる」ということです。

「施し」、私達の状況に置き換えると、「神を知っているが故に困っている人を助ける行い」、あるいはもっと広く「人への献身的な奉仕」、「愛の行い」、そのように考えることが出来るでしょうか。ある一家が旅の途中、雪のために起こった交通事故に巻き込まれて、車が故障してしまいました。レッカー車が来て故障車が引かれていった後、警官が彼らを近くのマクドナルドに連れて行ってくれました。彼ら(夫婦と子ども達)は、そこで車の修理が終わるのを待っていた。お腹がすいていましたが、お金がなかったので何も注文出来ませんでした。ところが彼らが座っている所に1人の男性が近づいて来て、ハンバーガーとポテトの入った袋を差し出してこう言った。「神があなた方にこれを差し上げるように言われました」。1つの例だと思いますが、いずれにしても、それは聖書の中で一貫して勧められていることです。{私などは、自分を振り返ってみて、「受けるばかり―(助けて頂くばかり)―で、何も出来ていないな」と思わされて心探られますが…。皆さんはいかがでしょうか}。しかし、私等は、何も出来ていないにも拘らず、それでも、例えば「神よりも人を意識する」、「人に自分の行いを認めさせようとする、賞賛を得ようとする」、そのような思いが心のどこかにあるのを感じます。

30年以上も前になりますが、私はシンガポールの教会に集っていました。仕事の関係でワープロを持っていましたので、議長さんご夫妻から「週報を作成して欲しい」と依頼されました。まだ学校でもワープロが普及し始めた頃で、私も慣れない手つきでキーを叩いて、時間をかけて週報を作りました。まず議長夫人から週報に記載する内容を聞いて、それをワープロに打つのです。結構時間がかかりました。ある時は、土曜日の夜に私の住んでいるアパートが停電になって、同僚の先生のお宅に重いワープロを抱えて伺い、ワープロを打たせてもらったこともありました。「なぜ自分がこんなことをしなければならないのかな」と思ったこともありました。日曜日になったら、車で随分走って、一番安いコピー店に行って、週報を印刷して、それを教会に持って行くのです。議長さんは、毎週礼拝の終わりには、前に立って色々とアナウンスをされます。ところが、私がそんなに苦労して週報を作っているのに、そのことを一言もアナウンスされないのです。私は「一言くらい皆に紹介してくれても良いのではないか」と思いました。しかし、何週間経ってもアナウンスされない。私の顔がだんだん歪んで来たのだろうと思います。ついにある日、議長は、私の週報の奉仕についてアナウンスされました。私はやっと満足しました。しかし私は、しばらくして気が付きました。おそらく議長は、今朝のこの御言葉の故に、私が「天からの報い」を損なうことがないように、敢えてアナウンスをされなかったのだろうと気付いたのです。その時にはもう遅かったのですが…。そんな恥ずかしい過去があります。

イエス様の言葉に帰ります。何が問題なのか。もちろん、信仰故の善行、神に捧げられるべき行いが、人に自分を認めさせるための行いとなっている、つまり「偽善」になっているということが問題なのですが―(因みに、それでも、しないよりした方が良いと思います。それで誰かが助かります)―ただその結果として「彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです」(2)とイエスは言われるのです。この「報いを受け取っている」という言葉は、当時、商業取引で使われた言葉です。何かを売って、代金をもらった時、領収書に「全額受け取りました」と書いた、その「全部受け取りました」という意味の言葉です。もし人の称賛を得たいと思って「施し―(愛の行い、信仰の行い)」をすれば、確かに人の称賛を受けることが出来るかも知れません。しかしイエスは、「それで全てだ」と言われるのです。6章1節では「天におられるあなたがたの父から、報いをうけられません」(6:1)と言われます。「信仰の行いのであるはずにも拘らず、神に捧げられたものではないから、神からの報酬は期待できない」

と言われるのです。ということは―(私達は「全て良きものは神から来る」と信じているはずです。「神の報いこそ何よりも大切だ」と考えているはずなのです。それにも拘らず)―その神様からの報いがない。それは本当に残念なことです。

しかし、残念だというだけではない。その問題の本質は何かというと、もし神からの報いではなく、人からの賞賛、人からの報いを期待するというのであれば、問題は、そこに神様への信仰は本当にあるのか、本当に生ける神様を生ける方として信じて、神様を相手にして信仰生活をしているのか、それが問われるのではないでしょうか。繰り返しますが「私の心の深いところに神への信仰は本当にあるのか」、その信仰の土台のところが問われることなのです。だからイエスは、問題にされるのです。

では、どうすれば良いのか。どんな思いをもって「愛の行い、あるいは信仰の行い」をすれば、神に喜ばれ、神の報いを頂くことが出来るのか。それをイエスは「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いて下さいます」(3～4)と言われます。この「右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい」という言葉ですが、「右手のしていることを左手に知らせるな」と言うのですから、「それほど『人に見せるために』という『偽善』に注意しなさい」ということだと考えることも出来ます。せっかく「愛の行い」をしても、大切な神の報いを失ってしまっては残念です。{ただ、あまり神経質になっても、かえって不自由になりますから―(何も出来なくなりますから)―そこはバランスが必要ですが…}。しかしこの言葉は、それだけ―(「人の目」に見せようとすることへの戒めだけ)―を意味しているのではないように思います。「あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい」(3)を繰り返し読むと、「他の人の目に見られないようにする」ということもあるかも知れませんが、むしろ、自分自身の心の問題が取り扱われているのではないかとも思えて来るのです。どういうことでしょうか。

私達の危険は、自分が「何か善行」をした時に、「特別なことをした」と言って、「(皆から)褒められて当然、あるいは(神様から)賞賛を受けて当然」と、自分で自分を誇るような、褒めるような思いを持つことではないでしょうか。あるいは、自分で自分に満足してしまうことではないでしょうか。それが「右の手のしていることを左の手に知らせる」ということではないでしょうか。あるコントに「『海辺で子ども達にいじめられていたカメを助けたのに、カメが何の恩返しもしない。浜辺で 3 時間待っていたけど、何にもない』と言って、役所に、住民票と印鑑を持って苦情に駆け付ける」という話を YouTube で見ましたが、彼が叫ぶのです。「助けてやったのだから竜宮城に連れて行かんかい。何もないということはないだろう」。これはコントですが、私達は、こうして自分で自分について誇ってしまう、あるいは不平、不満を持つ危険があるのではないでしょうか。

しかし、私達が善行をする。それが純粋になされた行いであれば、それは本当に尊いでしょう。しかしそれは「愛の業を受けた人だけが恵まれることなのでしょうか」。三浦綾子さんの「続氷点」の中に「人生の最後に残るのは、集めたものではなくて与えたものだ」と書かれてあったと記憶しています。人が世を去って行く時、後に残るのは、その人を通して為された『愛の行い』だということでしょう。それが「その人の人生の価値」として「尊い」ということです。つまり「他者に愛を行うことが自分を尊く生きること―(自分を本当の意味で大事にすること)」ということではないでしょうか。レオン・モリスという神学者は言いました。「他者を愛さない者は、自分を軽んじている」(L.モリス)。いずれにしても、他者に愛を行うことが、自分を愛することなのではないでしょうか。自分を尊く生きることなのではないでしょうか。そのような思いを持って善行を為すことが出来たら、そしてその善行を、誰でもない、神様に捧げることが出来たら、私達は、もっと自由に愛に生きることが出来るのではないでしょうか。神様と生きることが出来るのではないでしょうか。そして、そのような善行に対して、神様が報いて下さるのです。

いずれにしても、人に見せるためでもない、自分で誇るためでもない、そのような理想的な姿を描

いているのが「マタイ 25 章」の記事です。長いですが引用します。「そうして、王は、その右にいる者たちに言います。『さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渇いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです』。すると、その正しい人たちは、答えて言います。『主よ。いつ、私たちは、あなたが空腹なのを見て、食べる物を差し上げ、渇いておられるのを見て、飲ませてあげましたか。いつ、あなたが旅をしておられるときに、泊まらせてあげ、裸なのを見て、着る物を差し上げましたか。また、いつ、私たちは、あなたのご病気やあなたが牢におられるのを見て、おたずねしましたか』。すると、王は彼らに答えて言います。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです』」(マタイ 25:34～40)。

このような思いで、自由に善行に生きることが出来れば、素晴らしいと思います。いずれにしても大事なことは、私達が、誰を相手に、誰の報いを期待して、信仰生活を送るのか、ということです。人か、神か、それは、私達の信仰の内実を映し出すものという意味で、重大なことなのです。

そしてそのことについても、イエス様がお手本を見せて下さったのです。イエス様は、ご自分が語られた言葉が決して空しい言葉でないことを証しするかのように、ひたすら神様だけを見上げて、神様の御心を生き抜き、最後は十字架に懸かられました。その時、イエス様に感謝する人は誰もいませんでした。しかしイエス様は、甦られました。神様が死から甦らせたのです。神様の報いこそ、本当に素晴らしい報いであることを見せて下さったのです。神様の報いこそ、私達が期待すべき報いであることを教えて下さったのです。神様はいつ、どのように私達の信仰に、信仰の業に、善行に、愛の業に、報いて下さるのか、それは分かりません。報いの中のある部分は―(もしかしたら多くの部分は)―天の御国―(水晶のように光るいのちの水の川のほとり)―で主にお会いする時に与えられるものかも知れません。でも、それはとてつもなく素晴らしい報いであるに違いありません。神の報いこそ本当に期待する、そのようにして神の前に生きて行く信仰生活でありたい、天に宝を積む信仰生活でありたいと願うことです。